

教育の原型としての幼児教育

秋山 和夫

これまで、幼児教育はわかりにくい、というのが一般であった。幼稚園で幼児はいろいろと活動しているが、何を身につけさせるためにその活動がなされているのか、よくわからないという人達も多かった。

指導内容がはっきりしていて、その指導効果を、数量的に評価することに慣れている小学校教師から見れば、幼稚園の指導は歯がゆくて、見ておれないということであったのかもしれない。

たしかに、小学校では知識や技能の定着が主要な課題であった。これに対して、幼稚園は、倉橋惣三のことは借りれば、「幼児に生活の満足」を与える場であり、幼稚園の保育効果は、「無形中ノ無形」(関信三)であるということが出来る。

このような説に出会って、幼児教育は一層わかりにくいと嘆く人達もあった。そのために、幼児教育、あるいはその教育理論は、一般の教育理論からはみ出した、独特のものであるという考えを持つ人達も少なくなかった。

昨年暮れに出された、教育課程審議会の答申を貫く精神は、日本の伝統的な教育観を批判し、むしろ、これまでの幼稚園教育の理論の妥当性を認めているということが出来る。

そこでは、「画一的な教育」や「記憶中心の詰め込み教育」を排除して、「一人一人の個性に即した教育」「創造性や自己活動」を重んずる教育への転換が期待されている。

少し具体的に見れば、答申の中に次のような表現を見出すことができる。「自ら学ぶ目標を定め、何をどのように学ぶかという主体的な学習の仕方を見つけさせる」「自ら学ぶ意欲を育てることが特に大切である」「幼児、児童、生徒に活動や学習への適切な動機を与え、学ぶことの楽しさや成就感を体得させる」とか、「一人一人の幼児、児童、生徒の個性を生かすよう努める」といった表現がそれである。更に「学ぶことの楽しさや成就感を体得させる」ということの大切さの指摘がなされている。

このような考え方は、わが国の伝統的な教育観の大きな転換を迫るものである。知識をどのように理解させ、定着させていくかという前に、学習や活動への意欲をどう高めていくかということの大切さが強調されている。教育を学習内容から発想していくという考え方から、子どもから発想していくということへの転換である。

小学校低学年教育においては、このような考え方が、一段と強く打ち出されている。それは日常生活との関連

や、子どもの具体的な活動や体験を通して、総合的な指導を進めていくとする「教育の生活化」の方向である。今回の改訂で小学校低学年に新設される「生活科」においては、その考え方が如実に表現されている。

教育についてのこのような考え方は、「生活の教育化」を本旨とする、幼児教育の理論や方法に近づいてきたと考えることができる。

ところで、具体的な活動や体験を通して総合的に指導する生活科の指導方法は、これまでの小学校教育の中では必ずしも一般的ではなかった。このような指導方法はむしろ長い間、幼児保育の世界の中で培われてきたものである。

幼稚園や保育所では、そのような指導方法を一層充実徹底させていくことが望まれるし、それは同時に、小学校教育の新しい教育方法への示唆を与えることにもなるのである。

(岡山大学)